

込)に従事

六月十日 復員(引揚船米山丸 六月九

日舞鶴入港)

六月十四日 自宅到着 静養

八月一日 復職

昭和五十九年十月に退職してからは、地域住民の健康・福祉・親睦の発展のため、精力的にボランティア活動をこなし、各種団体委員等に参画、多忙な日々を送っておられ地域住民の信望を集めておられる。

(埼玉県 饗庭 秀男)

## 抑留記

埼玉県 山口 秀夫

大正十二年三月二十九日、大連市(当時関東州、現中国東北地方)にて出生。

昭和十九年晩春、家に帰ると「召集令状」と共に大連兵事部に出頭せよとのことで、翌日早速、大連兵事

部に出頭した。兵事部の人事係の准尉が出て来て「今回の召集は臨時召集で三カ月すれば帰れるのでしっかり軍務に励んで来い。ちなみに今回の召集は秘密召集なので知人や親兄弟にも知らせてはいけない。ただし勤務先の会社等には知らさない訳にはいかんだろう」との事であった。しかしながら家の者に知らさない訳にはいかないので母にその旨を話したところ、「お前の父も兄も軍隊に行っていないので、お前はお国のためにしっかり働いてきなさい」と言われた。もちろん召集令状を受け取ったのは母だから秘密も何もあるはずがないのだが。

さて、翌日は殊勝にも大連神社にお参りし「立派な兵隊になれるように」とお祈りした。家では家族と親類二、三人が集まり壮行会のまねごとをした。

出発は当時の大連駅の裏口にあった旧駅に集合することになっていたので、母が見送りに来てくれたが、駅の手前に憲兵が立っていて見送る人は皆そこで帰された。

汽車は特別列車で、皆召集兵ばかりであった。その

連中と話をすると、技術者が多いので（召集令状の兵種は工兵となっていた）、工兵といっても技術系の兵科だろうと思った。

携行品の中に弁当三分とあったので、そんなに汽車の旅にかかるのかと思っていたが、実際には一日半くらいで目的地の環埴に到着したと思う。

いよいよ環埴駅に到着。部隊より我々の班長となる軍曹と関係者の方々が出迎えてくれた。歩いて部隊に到着。その日の夕食は赤飯にトンカツ。御馳走ではあったが、あまり食欲がなかった。翌日の朝食を見るとまた赤飯と味噌汁。軍隊というところは毎日赤飯が出るのかと思議に思い、よくよく見ると高粱めしで、米が赤く染まっていたのだ。

入隊一週間くらいはお客様扱いだったが、その後は毎日厳しい訓練で、初年兵の間、一期の検閲が終わるまで実に辛い毎日であった。最初想像した技術系の部隊などともない考えであったことを思い知らされた。あまりの訓練の厳しさに、早く戦地に行って戦死した方がましだとさえ思ったことが度々であった。

しかし幹候あがりの教官、班長は実に良い方であった。特に班長は、召集兵で、現役時に支那事変に参加された方で、我々補充兵に対して思いやりのある方であった。

そのうち一期の検閲も無事終わったが、一向に召集解除の命令も無い。二期の検閲は無線通信の教育で一カ月余り訓練を受けた。その後は連隊本部で筆耕として勤務。そのうち一等兵に昇進した。

十月中旬頃、北滿の冬は厳しいので師団の弱兵を集め特別訓練を行うとのことで、同年兵と共にその隊に入った。ここでは毎日体操をしたりドッジボールをしたり、遊んでいるようなものであった。そんなある日、一緒に派遣された同年兵と共に原隊復帰の命令があり、いよいよ召集解除だと喜び勇んで原隊に帰った。時刻は午後六時頃で、中隊事務室に入ると人事係の准尉が「しばらくそこに立っている」と言われ、防寒外套に背のう、防寒帽もかぶり銃を持ったまま、ペーチカのきいた暑いぐらいの事務室で汗びっしょりになりながら立っていた。三十分くらい経った頃、よ

うやく准尉が「お前達が幹部候補生を志願しないというので書類を揃えていなかったが、師団の方針で有資格者は全員幹候の試験を受けることになった。おかげで俺は一週間ほとんど眠っていないんだ。三日後が試験だ。それまでしっかり勉強しろ」とのことであった。その頃戦況はますます悪くなり、召集解除の望みもなくなったので、試験はしっかり受けようと思った。翌日中隊長に呼ばれ「何故幹候を志願しなかったのか」と問われ散々怒られた。

その後無事に幹候に受かり、甲乙決定試験にも合格し甲種幹部候補生となった。

昭和二十年二月、原隊は本土防衛のため内地に引き揚げた。我々甲幹と十九年末に入隊した初年兵の幹候は山神府の部隊に転属した。やがてチチハルの工兵学校に入隊、八月十五日終戦。シベリアに抑留された。

最初はウオロシロフの郊外に入り、作業も石造りの建築物（兵舎と聞いていた）を造る仕事で、楽ではなかったが何とかこなしていた。

春三月になって道路作業となり、道路造りがほとんど

ん延びて行くので毎日が野宿であった。その作業内容は、幅六メートルの道路に側溝を掘り、道路面に十センチの砂利を敷き、中央を高く山型にすることであった。砂利は道路脇の土を五十ないし八十センチくらい掘ると出てくるのでその砂利を敷けばよい。ただし一人四メートルのノルマで、道路が土であろうが岩であろうがノルマに変更はない。岩の所になるとそんなに出来る訳がない。当時指揮者として行動していたが、ソ連の監督技術中尉に交渉するが聞いてもらえない。当時食糧を個人で受領し各人自炊していたが、もちろん夕食もとらずに作業したが、いくらやっても出来る訳がない。そのうち夜も遅くなり腹は減ってくる。そこで私も覚悟を決めて「皆作業止めて座り込め」と言って私も道路の真ん中に座り込んだ。警戒兵が来て「ダワイ、ダワイ」と銃床で小突き回す。三十分そうしているうちに中尉が来て「今日はもう帰っていい。明日から何日かのうちに今日の遅れを取り戻してくれ」とのことです。皆も納得し一応解決した。

その年も十月となり雪も降り始めた。道路作業の途

中に沼があり、そこにはバカ貝がいるという。それではということ皆、寒い中を裸になり沼の中へ入って貝を採った。相当な数をとり茹でて食べた。腹いっぱいになるまで食べたところ、翌日から便秘し、死ぬ思いであった。

夜寝る時はそこら辺にある乾草を盗んできて、積もった雪を除けて、そこに乾草を敷き、その上に木の枝で片屋根をかけ、前面でたき火をして身体を暖め眠くなるとそのままごろりと眠る。五分くらいとろとろと眠ると背中から寒気はい上がつてきて目が覚める。また起き上がって火に当たる。そんな状態を繰り返しているうちに夜が明ける。そしてまた作業に就く。そのような日々が十一月三日まで続いた。

その後、丸太小屋の比較的大きな収容所に入り伐採に従事する。二人一組で山に入り、一メートル五十センチの二人挽きの鋸で直径一メートルほどの立木を倒し、それを四メートルに切り、用材として使用する。また、枯れた立木は二メートルの長さに切断し薪にする。最初は一日かかっても一本の木を倒せず、夜遅く

まで作業をさせられた。そのうち鋸の目立てを覚えてからは切るのは楽に切れるようになったが、それを自動車道路まで運ぶのが大変であった。

その翌年の春にまた収容所を数カ所転々とし、昭和二十三年の春に最後の収容所に移動し伐採に従事した。もうその頃には日本に帰れるという希望もなくし、ただ毎日が苦しい伐採作業であった。

その間ただ一度、秋の収穫のため八人（と思う）でコルホーズ（集団農場）に派遣された。伐採に比べると作業は楽だし、食べ物野菜類を腹いっぱい食べられ、本当に楽な十五日間であった。

再びもとの収容所に帰り、十月になって急に帰国の命令があり、夢かと喜び勇んでナホトカに向かった。

ナホトカに着き、終戦以来初めて電灯の光に接し、こんなに明るいものかと感無量であった。しかし、まだまだ安心は出来ない。またもとの収容所に戻される話を聞いた。とにかく船に乗るまでは我慢しなければならぬ。

こうして無事引揚船「遠州丸」に乗ることが出来、

昭和二十三年十月二十九日、舞鶴に上陸した。思えば長く苦しい日々であったが、生きて帰れるとは誠に運が良かったと思っている。

異国の地で無念にも命を落とした方々の御冥福をお祈り致します。

### 【執筆者の紹介】

昭和十九年五月

満州第五七師団工兵第五

七連隊に応召

昭和二十年七月一日

チチハル丁兵幹部教育隊

入隊

八月十五日

終戦（ハルビンにて武装

解除）

十一月

ウオロシロフ郊外に到着

昭和二十三年十月二十九日

引揚船遠州丸にて舞鶴港

入港

十一月六日

復員

平成五年三月に退職してからは、地域住民の親睦発展のため精力的にボランティア活動に従事し、現在に

至る。

その他、戦友会の幹事に参画、多忙な日々を送っておられる。

（埼玉県 饗庭 秀男）

## 平和国家日本の礎とエピソード

東京都 井上 勇

あの昭和激動の時代といわれた昭和二十年八月十五日までの間、現在の中国を相手とした戦争から太平洋戦争の十五年にも及ぶ戦争が、無条件降伏という悲惨な結果で終わりを告げたとき、国民はぼう然とたたずみながらも平和国家日本の姿を脳裏に描き、荒廃した祖国の復興に立ち上がり汗を流したのであった。この国民の悲願がかない、「永久に戦争を放棄する」という平和憲法が公布され、この平和憲法に培われて今の日本の姿がある。この間平和と繁栄が続き、国は富み、人々は華美を競いつつ、日々の生活を心ゆくまで